

我等がために踊れ

ジョン・ゴールズワージー 作（増谷外世嗣 訳）

「マザー、踊り子はひどい悲しみにくれております。両手で頭を抱えたまま、ただじつと虚空を見つめたきりでございます。そばでみていても空恐ろしくなつて参ります。マザー、私はあの娘にお祈りをさせようと思いました。可哀そうに……、あの娘はどうやってお祈りするのかわからないのでございます。信仰心など微塵も持つておりません。懺悔さえ拒んでしまします。あの娘は異教徒、それも救いのない異教徒でございます。一体どうしてあげたらよろしいのでしょうか。マザー、このしばらくの間、少しでもあの娘こ楽しませてあげますには？ 身の上話でもさせようと思いました。返事もいたしません。座ったきりでじ

つと虚空を見つめております。

そばでみておりますだけで、こちらの胸が痛んで参ります。死ぬまですこしでも、あの娘^こを慰めてやれる道はないものでしょうか？ あんな若い身で、あんなに生命^{いのち}にあふれたまま、信仰も持たないあの娘^こが死んでゆくなんて！ それも銃殺されるなんて……、

あんな若くて美しい娘が……、マザー、思っただけでも空恐ろしゅうございます」

こう話し終わると、その小柄な年嵩の修道女は両手を上げて、灰色の衣に包まれた胸の上に、それを静かに組み合わせるのであった。

茶褐色のやさしい彼女の瞳は、彼女の前にある、頭巾と灰色のなめらかな髪の下に、白蠟のように青白いマザーの顔を怪訝そうに見上げる

のであった。

灰色と白の衣の下にはまるで肉体がないのではないかと思われるほどすらりと痩せたマザーは深い物思いに沈んでいた。

――自分の監視に委ねられた女スパイ、ジプシーの血が混ざっていると思われる踊り子、その娘が恋人であるフランスの海軍士官から軍の機密を盗み取って、スペインにいるドイツ人にそれを売ったのだ。

裁判の上ではその点なんの疑いもなかったということだ。

そこで彼らは娘をこの修道院へ連れてきて

「この十五日まで、この娘を預かってくれ、牢獄にいるよりはあなた方と一緒にいた方がましだろう」

と言い渡して行つたのだ。

銃殺される――しかも女の子が。

思っただけでも身震いがする。がしかし、それも戦争のためだ。

フランスのためなのだ。

やさしい茶褐色の眸をした小柄なシスターを見下ろして、マザーは答えた。

「それでは私が行って見て見ましょう。その娘の部屋へ案内してください。」

二人は廊下にそって行き、静かに部屋に入った。

踊り子は脚を組み合わせてベッドの上に座っていた。

肌には血の気もない、ただ、東洋人の血によってそそぎ込まれたかすかなサフラン色だけが垣間見える。

顔は卵形で、眉毛が少しつりあがっている。

黒い髪の毛が富士型の額の上に垂れ、官能的だが繊細な唇の間からは白い歯が光っている。

両腕を組み合わせた格好はその柔らかな体の中に密かに炎を燃やしているかのようだ。

シェリー酒の色をたたえたその眸が、彼女を訪れてきた客たちを射抜き、さらには白い壁をも突き通して彼方を見、檻に閉じこめられた豹の眼のように光っている。

マザーが声をかけた――――

「あなた、何か私達にしてほしいことはないかしら？」

娘は腰から上の体をゆすった。絹の着物の下でしなやかな肉体が震え

るのが眼に映った。

「あなたは何かに悩んでいるのでしょーうね。あなたが祈りしないことも聞いているんですよ。気の毒にね。」

踊り子はにっこりと笑った。

しかし、何か豊かな調べ、そして長いキスを味わうような甘美な微笑を瞬く間に消すと、踊り子はかぶりを振った。

「私は何もあなたを苦しめるようなことをいいたくないですよ。あなたの悩みに同情しているのですから。私にはあなたの気持ちがよくわかるですよ。何か読んでみたい本とか、何かあなたの気持ちを少しでもまぎらわしてくるようなものはないかしら？」

踊り子は組んだ両腕をほどいて、それを首すじの後ろにまわし握りし

めた。

その仕草のあでやかなこと、たおやかなこと……もとよりその全身が美しいのだ。

マザーの白蛾のような頬にもかすかな赤味がさしてきた。

「それじゃあなた、私達のために踊りを踊って見せてくれない？」

再び甘いぶどう酒の味にも似た微笑が踊り子の顔に浮かび、今度はそれが消えずに残っていた。

「ええ、踊ってあげますわ……喜んで。そうすればあたしだってどんなに楽しいか知れないわ。」

「それはよかった。あなたの衣装はこちらに持ってこさせますよ。

食堂で、食事の後ですることになりました。伴奏がほしければピア

ノも出してあげますよ。マチルダさんは立派な音楽家ですもの。」

「ええ、伴奏……すてきだわ……何か簡単な舞踏曲でいいわ。

マザー、タバコを吸っていいかしら？」

「ああ、いいですよ。巻きたバコでも持ってこさせましょうね。」

踊り子は片手を差し出した。マザーは自分の細い青筋の出た華奢な手の間に、娘の柔らかで暖かな温もりを感じて身震いした。

明日はこの手も冷たくこわばってしまうのだ！

「それじゃ、これですようなら」

「踊り子が私たちのために踊ってくれますっつて！」

これがシスター達の合言葉になった。

奇跡でも待つかのように、みんなが待ち焦がれた。

ピアノを備え、楽譜を手に入れて来た。夕餉をしたためながら、囁きの声が漏れてきた。

不思議なこともあるものだ！ 闖入だ！ 思い出の中に住む小さな陽気な幽霊たちの！ ああ何という劇的な出来事なのだろう！

間もなく食事も終わり、テーブルも片付けられ、そして踊るためのスペースが作られた。壁を背に、長いすの上には白い頭巾を戴き灰色の衣をまとった六十人ものシスター達が座って待っていた。

真ん中にマザーが、ピアノの前にはシスター・マチルダが座った。

先刻の小柄な年嵩なシスターが先に現れた。それから、長い白壁の食

堂に向かつて、踊り子が黒ずんだ木の床を踏みしめながらゆつくりと歩いて来た。

シスター達の頭が一斉にそちらを向いた。

――ひとりマザーだけがみじろぎ一つせずにすわって考えていた。

「誰か軽はずみな頭に無分別なことを考えてくれなければいいが」

踊り子は長い黒絹のスカートをはき、銀色の靴と長靴下をはいて、腰の周りには幅の広いきっちり締まった網織物を巻き、胸は黒いレース飾りのついた銀織でぴったりと包んでいた。

腕は素肌のままで、黒髪的一端には紅の花をさし、手には黒い象牙の扇を持っている。

唇には軽く紅をさし、眼は薄く黒く縁取り、顔全体が仮面のような。
彼女は真正面に立ち視線を地面に落とした。

シスター・マチルダがピアノを弾き始めた。踊り子は扇をあげた。

そのスペインの踊りでは、彼女は自分の立っている所からほとんど動か
かず、体をゆすり、震わせ、くるくる回りながら、じつと身体からだの平衡
を保っていた――顔の中の眼だけが生き生きと輝き、眼前に長く居並
ぶ顔、顔、顔の、この顔、あの顔と視線を落として行つた。

そのシスター達の顔にあらわに浮かび出ている幾多の感情――好奇心
と疑惑、快感、躊躇、恐怖、そしてまた重なる好奇心。

と、シスター・マチルダが弾く手をとめた。

踊り子は一瞬、立ち止まった。

シスターの列から、かすかなざわめきの声が起こった。

そして、シスター・マチルダが再び引き始めた。ポーランドの舞曲であつた。

瞬間、踊り子はその聞きなれない曲のリズムを捕えようとするかのように、耳を傾けた。

と、彼女の足が動き、唇が軽く開き、軽やかに飛ぶ蝶のように美しくあでやかに踊った。憂いの蔭さえなく、……、

見守る者たちの唇には微笑ほほえみが浮かび、密かな喜びのささやきがもれていた。

マザーは身じろぎ一つせずに座っていた。その唇は固く閉ざされ、
細い指は固く組み合わさっていた。

過去からの幻が、何か奇妙なふるいオルゴールから跳び出す人形のよ
うに、出たり引つ込んだりしていた。

あの遠い昔、―――彼女は思い出していた。

恋人が普仏戦争に倒れ、わたしは信仰の道に入ったのだ。

異教徒の世界から来たこのたおやかな肉体、黒髪に紅花をさし、顔に
白粉をぬり、甘い眼をした姿が、かつては自分も持っていた華やかな
胸の高鳴りを、優しく憧れの気持ちにくるみつつも、思い出させてく
れるのだった。

あの高鳴る鼓動のまだ消えやらぬうちに、わたしはそれを地面に埋めてしまおうと教会の門をくぐったのであった。

舞踏曲がやんだと、再びハバネラの曲が始まった。

青春の鼓動を埋めてしまった後の、暗闇にひそかに脈打つ鼓動の追憶が蘇って来る――

マザーは顔を左右に向けた。

――こんなことをして、思慮が足りなかったのではなからうか？

こんなに沢山の軽はずみな頭で埋まり、こんなに沢山の若々しい胸の集うところに！

しかし、この哀れな異教の娘の暗い最後の数時間を慰めてやるのがな

ぜいけないのだろうか？

あの娘^こは楽しそうに踊っている。そうだ、今あの娘^こは幸せなのだ！

なんとという躍動だろう？　なんとという熱中ぶりだろう！

踊り子は並み居る眼を、シスター・ルイズの眼までも、蛇がうさぎの眼を魅入るように捕えている。

マザーは危うくにつこりするところだった。可哀そうにルイズ――
彼女もまた失った青春を思い出しているに違いないのだ。

ところが、ちょうどそのルイズの魅入られた、おののきの顔の向こ
う側に、マザーは若きシスター・マリの顔を見た。

彼女の若い眼は恐ろしいほど真剣に踊りに見入っている。

その眼、あの唇！　シスター・マリー――あんなに若い――やつと二十歳^{はたち}

になったばかりの……恋人を戦争で失い……それも死んでからまだ一年しかたっていない！ マリ、修道院で一番きれいなマリ！ その手はひざの上にあんなに硬く握りしめられているではないか！ それに……そうだ……踊り子が見ているのは確かにシスター・マリなのだ。……マリに向かってあの踊り子はあのしなやかな狂おしい手足をくねりながら回している。マリのためにあの異様な甘味な微笑が、魅惑的な紅い唇に浮かんでは消え、消えては浮かんでいるのだ。次々と繰り広げられる踊りに込めて……愛する花にたわむれる蜜蜂のように……踊り子はまるでシスター・マリにまわりついているようではないか。

マザーは考えた……

「私のした、この仕業は聖母マリアの仕業であつたろうか？それとも悪魔の仕業ではなかつたか？」

今度は、踊り子はシスター達の列に触れんばかりに床をかすめるようにして進んできた。

その眼は生き生きと輝き、その顔は誇らしげに、その肉からだ体は高らかに若さを躍動させていた。

あ、シスター・マリのところに！

どうしようというのだろうか？ちらつと一瞥、そしてさつと扇を一闪、音楽がやんだ。踊り子は投げキスをした。

「あいがとう、皆さん！さようなら！」

ゆるやかに身体を揺すりながら、もと来た通り、彼女は暗い床の上を歩いて彼方へと消えて行った。小柄な老シスターが後について行った。長い修道女たちの列からため息の音が、そして――ああ確かに――一つの嗚咽が聴こえた。マリの声だった。

「さあ皆さん、お部屋に帰って！ マリさんはちよつと」
若いシスターは前に進み出た。眸は涙でうるんでいた。

「マリさん、あの可哀そうなひとの罪が赦されるように祈ってあげなさいね。だけど本当に悲しいことですものね。お部屋に帰ってお祈りするのですよ」

ああこの娘はまた何という優雅な歩き方をするのだろう！

その手足もまた美しい。マザーの口にため息が漏れていた。

冷たい灰色の朝、地面には雪が降っていた。

朝のミサの真っ最中に兵隊がやって来て、踊り子を引き立てて行った。
しばらくして、静けさを破る銃撃の響き！

唇を震わせながら、マザーは神の前に、踊り子の魂のために祈った

――

その夜、修道院ではシスター・マリが行方不明となり、皆で行方を捜した。

だが、遂にマリは見つからなかった。

二日経って、一通の手紙が届いた――

「マザー、お許し下さいませ。私は現世^{うきよ}に帰りました。マリより」

マザーは静かにじっと座っていた。死の中の生！若き日の追憶を秘めた古いオルゴールの中から、幾多の幻影が飛び出してきた。

踊り子の顔、髪にさされた紅の花、暗い甘美な眸、飛び跳ねる指先でふれたあの投げキッスに開かれた唇よ！

（千九百二十二年 作品）